

待つ人

今から思うと、邦夫は町子さんの望みをもっと早く叶えてあげることが出来た唯一の人間だったのかもしれない。

左京区の黒谷町に住む高校生の邦夫が町子さんと出会ったのは篠突く雨が降る夕方、友人宅から帰る途中だった。浄土宗の大本山として有名な金戒光明寺の境内を抜け、坂道を下ると白川通に出る。そばに市バスの真如堂前バス停があり、すぐ横の歩道橋を渡ると自宅は間近である。

その歩道橋の真ん中で八十歳くらいの老婆が立ち止まっていた。藤色の着物に浅葱色の帯という出で立ちである。なぜこんなところで立ち止まっているのか。邦夫は疑問に思ったが、それも一瞬だった。何しろこの雨である。制服のズボンがべた付いて気持ち悪かった。早く家へ帰りたい。邦夫は早足で歩道橋を渡り始めた。老婆の横を通り抜けようとする。しかし、彼女の差している武骨な黒い傘が邪魔でなかなか通り抜けられない。

「あら、ごめんなさい」

邦夫が声をかける前に老婆は傘を動かした。だが、邦夫はすぐには通り抜けず、「どうかされたんですか？」と尋ねた。

「タクシーを待っているんですよ」

老婆は青白い顔をしていたが、至極穏やかに微笑みながら答えた。邦夫はいくらか拍子抜けした。もしや体の調子がおかしいのではないかと考えていたからだ。しかし、ただタクシーを待っているだけなら何ら問題はない。歩道橋の上で待っているというのが少しばかり妙だが、彼女の視線が常に宝ヶ池の方向から走ってくる車に向けられているところを見ると、遠くのタクシーを早く見付けるためなのかもしれない。

そこに黒いタクシーが走ってきた。表示は空車になっている。これに乗るのかと思いきや、老婆は少しも動く素振りを見せなかった。

続けてもう一台、今度は青いタクシーがやって来た。これも空車だ。今度こそ乗るのかと思ったが、やはり老婆は微動だにしなかった。

邦夫は首をかしげ、今度は注意深い眼で老婆を観察した。すぐあることがわかった。注意して見ているタクシーとそうでないタクシーがあるのだ。注意して見ているのはいずれもヤサカタタクシーの車両だった。真意を確かめるべく邦夫はもう一度、老婆に話しかけた。「ヤサカタタクシーが気になりますか？」

老婆は邦夫がまた声をかけてきたことに少しばかり驚いていた。

邦夫が自己紹介をすると、彼女も自らを吉永町子だと名乗った。邦夫は親しみを込めて町子さんと呼ばせてもらうことにした。

「町子さんはひょっとして四つ葉のタクシーを探しているんじゃないんですか？」

三つ葉のクローバーをシンボルマークにしているヤサカタタクシーには、数台だけクローバーが四つ葉に変更されたものがある。邦夫にはそれくらいしかヤサカタタクシーを注意深く見つめる理由が思い付かなかった。町子さんは柔和に微笑んだ。

「ええ、そうですよ。見付けたら幸運が訪れると聞いて、こうして毎日ここで四つ葉のタクシーを待っているんです」

「毎日？ それは凄いですね。何か願い事でもあるんですか？」
何気なく邦夫が聞く。だが、彼の軽い気持ちとは裏腹に町子さんの青白い肌に暗い影が差した。邦夫はそれを見逃さなかった。慌てて手を振り、「こういうのは人に教えるものじゃないでよね」とはぐらかした。ありもしない急用を思い出したと告げ、逃げるようにその場を離れる。

それ以来、邦夫の頭から町子さんの暗い表情が離れなくなった。なぜあんな表情をしたのか不思議に思う一方、軽率な質問を悔いる日々が二週間ほど続いた。

そんな暗澹たる思いをしていた邦夫に突如として「幸運」が訪れる。平安神宮のそばを散歩していた時、偶然にも四つ葉のタクシーを発見したのだ。乗客の老夫婦が料金を払い終えたのを確認してか

ら乗り込む。百万遍を回って真如堂前のバス停まで行くように運転手に告げる。こうすればいつも宝ヶ池方面を見つめている町子さんが簡単にこのタクシーを発見できるはずだ。そうしてなぜこのタクシーを待っていたのか今度こそ理由を聞くのだ。

邦夫の言った通りにタクシーが走る。白川通に出て市バスの錦林車庫前を通過する。邦夫は希望に満ちた表情で前方を見つめた。いよいよ例の歩道橋が見えてくる。

途端に邦夫の表情が硬くなった。町子さんの姿がなかったのだ。慌ててタクシーを降り、周囲を見渡す。毎日いるはずの町子さんがどこにもいない。邦夫はその場で呆然と立ちつくした。

邦夫はそれから毎日歩道橋で町子さんを待ち続けた。彼が町子さんの身に起きた異変を知ったのは三週間後のことだった。町子さんは亡くなっていた。邦夫が四つ葉のタクシーを見付ける二日前にある。邦夫は町子さんと同居していた長男夫婦に会った。町子さんの夫は七年前に他界していて、仏壇には二人の遺影が並べられていた。六十歳くらいに見える長男夫婦は町子さんが死の直前まで歩道橋に通っていたと教えてくれた。一方、彼女の死因については「もともと内蔵が弱かったから」と長男が言っただけだった。その顔は決して青白くなかった。

死期が近いことを悟っていた町子さんは自分の死後、夫のもとへちゃんと行けるように願掛けするつもりで四つ葉のタクシーを待っていたのではないか。それならあの日、着物と不釣り合いな傘を差していたのも納得できる。あれはきつと夫の遺品だったのだ。

果たして町子さんは四つ葉のタクシーに願掛けできたのか、そして夫のもとへ無事にたどり着くことが出来たのか。篠突く雨が降る度に邦夫はそのことを考えてしまう。

(了)